

は　じ　め　に

このごろになって、住宅の「居住性」という言葉がよく使われるようになった。見方によっては一世帯一住宅を達成した住宅需要が、量から質の方に動いてきている証左かもしれない。だが、居住性というのは、はなはだあいまいな言葉であって、格別な定義も見当たらないようである。断熱性とか遮音性とかはもちろん、コンセントの位置からドアのデザイン、はては門前の坂の傾斜や電車が遠いか近いかまで居住性といえはいえなくもない。

しかしまあ一般に、木造住宅の居住性とか、戸建住宅の居住性などという場合には、立地環境や付帯工事の出来具合などは別にして材料特性や設計施工にもとづく住み心地のよさを指すことになるであろう。実はこの住み心地の程度を判断することは、その対象が人間という生物である故もあって、大変難しいことなのである。十分な検討期間と十分なデータの積み上げが無くてはこの複雑多岐にわたる事象を解析して万人を納得させることは出来ない。

当センターでは、数年前から財第一住宅建設協会の御依頼のもとに、住宅の居住性に関する調査研究を実施してきた。文献調査からはじめて、各界の専門家の専門的立場からのヒヤリングを行うなど検討を重ね、若干の実験も行ってきたが、昭和56年度においては、各種住宅の居住者に対するかなり詳細にわたる実状ならびに意識調査を行った。その結果をとりまとめたものが本報告である。このアンケートおよびヒアリング調査は報告書中にのべているように、複雑な内容にもかかわらず回収率も高く、従来なかったような生活の実態に即した回答が得られ、貴重な資料となった。特に住宅の間取りや家具などに関連した分析は、材料や施工に偏した従来の調査に、設計計画上の指針も与えてくれるものと思われる。本報告が住宅関係者の多少のお役に立つことを心から期待するものである。

この調査の企画検討に当られた当センターの居住性委員会の鈴木正治委員長はじめ委員，ならびに，アンケート調査票の回収にご協力下さった各位に深い感謝の念を捧げたい。また，アンケートの解析やとりまとめには栄美智子女史にたいへんお世話になった。ここに特記してお礼を申し上げたい。最後になったが，この事業を依託され，調査の機会を与えられた上，本報告として取まとめをお許し頂いた財団第一住宅建設協会に，あらためて深甚な謝意を表す次第である。

財団法人 日本住宅・木材技術センター

理事長 上 村 武